

あびこの文化

発行人
村上智雅子
我孫子市
若松122-6
04(7184)
1804

令和七年度総会終了

五月二五日、午後二時から我孫子南近隣センタ―九階ホールで、文化講演会に引き続き、令和七年度総会が開催されました。

司会の佐々木副会長の開会宣言の後、村上智雅子会長の挨拶が行われました。

引き続き、会員の加藤マリ子さんが議長に選任され、議案の審議に入りました。

当日提案された議案の項目と採決の結果は、以下の通りです。

第一号議案 令和六年度事業報告

1. 総会、文化講演会の開催
2. 白樺文学館との連携強化と同文学館リニューアルへの協力
3. 会員の増員・増強
4. 地域の歴史の掘り起こしと、郷土の文化の維持・創生
5. 史跡文学散歩の実施
6. 放談くらぶの開催
7. 文学の広場掲示板への短歌六首掲示
8. 「美しい手賀沼を愛する市民の連合会」の活動テーマへの取り組みと行事参加
9. 文化活動関係団体との連携協力
10. プロジェクト活動の活性化
11. 白樺派についての継続的研究・勉強
12. 我孫子市生涯学習出前講座の推進

以上について村上会長から詳細な報告がなされました。その後採決の結果、提案通り可決承認されました。

第二号議案 令和六年度決算及び監査報告

令和六年度決算について稲葉義行会計幹事から説明があり、収支決算額五二万五、七九一円で、次期繰越金は二五万二、五六二円が報告されました。その後、芦崎敬己監査役から「適正に処理されている」との監査報告がありました。採決の結果原案通り可決承認されました。

第三号議案 令和七年度事業計画

I 令和七年度事業運営の方針

II 令和七年度事業計画

1. 総会・文化講演会の開催、
2. 白樺文学館との連携強化
3. 会員の増強
4. 地域の歴史の掘り起こしと、郷土の文化の維持・創生
5. 史跡文学散歩の実施
6. 放談くらぶの開催
7. 文学の広場掲示板への短歌掲示
8. 「美しい手賀沼を愛する市民の連合会」の活動支援と行事参加
9. 文化活動関係団体との連携協力
10. プロジェクト活動の活性化
11. 白樺派についての継続的研究
12. 我孫子市生涯学習出前講座の推進

以上について村上会長から詳細な説明がなされました。参加会員から、総会次第の誤記を指摘するご意見及び事業計画7の「短歌掲示板」に関して意見があり、今後の事業運営に参考にする回答をしました。その後採決の結果、提案通り可決承認されました。

第四号議案 令和七年度予算

令和七年度予算について稲葉義行会計幹事から説明があり、収支予算額四四万〇、六四二円の説明がなされました。その後、採決の結果原案通り可決承認されました。議長の解任後、司会者から昨年度入会の会員を紹介し、全員で集合写真を撮りました。



文化講演会に関して

会長 村上智雅子

総会に先立って行われた講演は、教育委員会、生涯学習部次長 辻 史郎氏の『暗夜行路』に描かれた日本橋界限です。辻氏による当会文化講演会は二度目で、前回は平成二七年に「大光寺貝塚と三人の男たち」坪井正五郎・柳宗悦・村川堅固」について話されました。それ以来、コロナ禍を挟んだ辻氏の久しぶりの講演に期待は高まりました。

当日は会員はじめ、志賀ファンや建築関係の方も含めて、錚々たるメンバーの方が耳を傾けました。辻氏は、志賀直哉への崇敬と綿密な調査と的確な思考を踏まえて、映像を生かしながら、朗々と語られました。

講演内容につきましては、次頁の稲葉義行さんの詳細な報告文をご参照ください。

講演終了後、参加者からいくつかのお声が届きました「再開発などで今注目の日本橋界限を志賀の目を通して語られ、橋梁を巡る専門的説明も興味深かったです」とか、「志賀の『暗夜行路』を読み始めました」、「語りが素晴らしく、ワクワクして聞きました」等のお声に、私も同感すること多々ありました。

『暗夜行路』は、私も何度か読みましたが、辻氏が指摘された主人公謙作が、会社員の兄信行と、日本橋付近で会うシーンの一文は何となく覚えがある程度のものでした。改めて朗読を聞きますと、当時の日本橋付近を行き交う俥、自動車、荷馬車、自転車の有様、それらを取り巻く建築物や橋の様子を書いた志賀の描写の正確さと、記憶力の明確さに心動かされました。その上いくつかの橋の映像に加えて、専門的な知識まで重ねられましたので、立体的に理解することができました。お忙しい中、急なお願ひにもかかわらず、ご準備いただいた辻氏に感謝いたします。

参加報告

第四二回 文化講演会

『暗夜行路』に描かれた日本橋界限

副会長 稲葉 義行

令和七年五月二五日の我孫子の文化を守る会総会に先立ち、文化講演会が開催されました。

講師は白樺文学館館長の辻 史郎氏です。

『暗夜行路』の作者志賀直哉の年譜を概略しますと、明治一六年宮城県石巻生まれ、明治二二年学習院初等科入学、明治三四年高等科の時、内村鑑三に師事し人を感動させたいと文学者になることを決意する。明治三九年東京帝国大学（英文学科）進学、夏目漱石に私淑、明治四五年父と



くの作品を我孫子時代に発表している。特に、父と和解し『和解』を発表、大正十年には志賀直哉唯一の長編小説『暗夜行路』を連載開始（中断を挟み昭和十二年に完結）している。

『暗夜行路』の主人公は時任謙作、駆け出しの小説家で父と不和になり「高等遊民」生活を送っている。志賀直哉自身がモデルである。

日本橋界限は神保町・銀座などと並んで志賀の学生時代からの行きつけの場所であった。関東大震災、東京大空襲、高度経済成長そして昭和から令和にかけてのデベロッパによる再開発事業によって、志賀が眺めた建物や景観は失われてしまったが、書籍や文具を扱う「丸善」、「小僧の神様」の舞台となる寿司屋のモデルである「蛇の市」等、現代でも暖簾を守る店がある。

『暗夜行路』の日本橋界限の描写はいつ頃のものなのか？ 志賀直哉の伝記『志賀直哉（上下）』を記した、志賀の弟子阿川弘之のその下巻に『暗夜行路重箱帖』という章を設けている。阿川によると、「重箱帖」と名付けた理由として『暗夜行路』につい

の不和から出奔、尾道に居住、大正三年漱石から「暗夜行路」としてまとめられる小説を新聞小説として掲載依頼を受けるが書けず辞退する。同年、武者小路実篤の従妹勘解由小路康子（かでのこうじさだこ）と結婚。大正四年柳宗悦の勧めで我孫子に移住。この時から大正十二年まで小説家人生を送り、『城崎にて』『流行感冒』『小僧の神様』『雪の日』等多

て「此の大作に関する（論者たちが解明し残した）その種の些事を拾い集め、私の手でなしうる限り明らかにしておこう」というのがこの章を「重箱帖」と題する所以である。」と説明している。『暗夜行路』という長編は一つ一つを手を取って見れば極めてリアルスティックで美しく堅固な細片を、上下左右の繋がりなどお構い無しに嵌め込んだモザイクの名品の如きかんじがする。」という論法に至った。つまりエピソードは実際の出来事を下敷きにしたリアルなものであるが、小説の中では年代的な前後関係は必ずしも守られてはいない。

『暗夜行路』の日本橋界限の描写について、明治五年に架橋した木造の日本橋が近代的に二連アーチ橋に架け替えられる工事途中の様子が描かれていることから、明治四四年四月三日の架け替え開通式に先立つ明治四三年の情景であるとする阿川の年代観を基に、志賀の文章を追ってみる。小説の前篇最後に尾道行を決心した謙作が兄の信行と日本橋界限で会うシーンがある。

【翌日、午後四時少し前、彼は三越の角で、近くの火災保険会社から出てくるはずの信行を待っていた。年の暮れ近い



夕方、忙しき室町通りで、電車は北から南からも絶えず来てはその前で留まり、車掌が同じことを言つて、また動いて行つた。俥、自動車、荷馬車、自転車それからその間々を縫つて人間が四方へ勝手な速さで歩いて行つた。犬も通つた】



謙作が兄を待っていたのは、日本橋三越本店のかどで、「室町通り」と言っているのは、現在の「中央通り」と思われる。この通りにはかつて「都電（当時は東京鉄道本通り線）」と呼ばれる新橋と神田須田町を結ぶ路線として路面電車が往来した。「車掌が同じことを言つて」とあるのは、乗客に向かつて「室町一丁目」と停留所名を連呼していたのであろう。

謙作が兄信行を待っていた三越は木造三階建の外観ルネサンス様式の仮営業所であり、当時の写真を見ると、玄関前には大勢のお客が入場の順番を待っている。三越は呉服商から出発しているので、まだ、屋内は履物を脱いで入店する習慣があり、下足番が居て客の履物を預かっているもので、行列ができていた。

【彼はぶらぶら日本銀行の方へ歩き出した。小さい郵便局の前を通るときに丁度四時が鳴っていた。間もなく、広場を三方から囲んでいる三井の建物から吐き出されるように大勢の人々が出てきた。杖を小脇へ挟んで、巻煙草に火をつけている者がいる。先に行く仲間を小走りに追いかけて行くものがある。見る見る広場はこの連中で賑わった。日本銀行からも出てきた。正金銀行からも、その他からも出て来た。そして、三々五々ぞろぞろと通る。彼は直ぐその中に信行を見出した。（中略）日本橋の仮橋へ来た。土台を築くために囲いをした、その中へ浸み込む水を石油エンジンで絶えず汲み出している。亜鉛板の変に

反りかえった屋根から、細いのと太いのと二本の煙突が出ていて、細い方はスボスボと勢いよく蒸気を吐くたび震えていた。そして太い方は赤さびて、その頭から元気のいい煙を僅かに立てている。セメントに子砂利を混ぜたのを畚箕（もっこ）で陸から運ぶものがある。頬髯のいかめしい土方がそれをシャベルでならしている。一方ではその上へ蓆を敷いて、向かい合った二人が、胴突きで、「よいさよいさ」と突いていた。背広に日本脚絆をはいた男が測量をしている。その彼方（むこう）で、丸太を二本立て、それへ貫き板をX字なりに打ちつけている者がいる。そして、その下の油のギラギラ浮いた水溜で顔を洗っている女労働者があつた。二人はちよつと立ち止つて欄干へ寄り、そしてまたそれを離れて歩き出した。】

小さい郵便局は駿河町郵便局、四時の時報は退勤のベルと思われるが、明治三十五年一月二二日閣令第六号で九月一日より四月十九日は午前九時から午後五時（それ以前は午後四時まで）が勤務時間であり、民間は午後四時退勤のままであつたのか、それとも夏期の思い出を記したのか謎である。広場を三方から囲んでいる三井の建物は、三井の各社の機能を集約させた建物、明治三十五年竣工、地上四階地下一階で電灯や暖房・エレベーターを備えたレンガ造西洋風建築、正面が三井銀行、左翼（東）に三井物産、右翼（西）

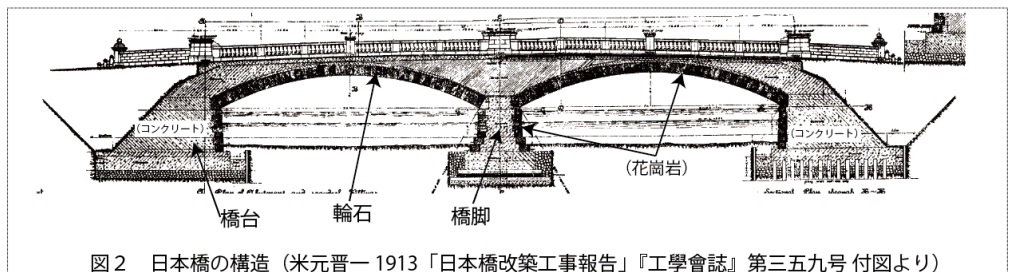


図2 日本橋の構造（米元晋一 1913「日本橋改築工事報告」『工學會誌』第三五九号 付図より）

に三井鉱山などが本社を構えていた。日本銀行は江戸時代の金座跡地に明治二九年竣工辰野金吾設計、日本人初の国家的な西洋建築物として国の重要文化財に指定。正金銀行は横浜正金銀行東京支店として明治三二年竣工、設計者は長野宇平治（辰野金吾の弟子）、現存せず。

『暗夜行路』の日本橋のシーンはいつのものか？

（一） 架け替え工事の工程と日本橋の構造。

仮橋架設工事は明治四〇年一〇月二〇日から四一年四月七日、旧橋撤去に先立ち、東側に人馬車用、西側に路面電車用の仮橋設置、第一期工事は明治四一年九月七日から四二年六月二二日、旧橋取り崩し、四月六日締切り工事完了締切り内の浸水をポンプで排水、第二期工事明治四二年六月二七日から同年九月七日橋台及び橋脚基礎工事。締切り内の掘削箇所コンクリート打設等。第三期工事明治四二年六月二七日から四四年三月二日橋台及び橋脚の築造。第四期工事、明治四三年九月一九日から四四年三月二八日、仕上げ工事、橋面石敷き、アスファルト敷設等明治四四年四月三日開通式。日本橋の構造は石材とコンクリートによる「複合構造アーチ橋」で石造アーチ橋と鉄筋コンクリートアーチ橋の端境にあるもので札幌の創成橋と並んで非常に希少な事例である。コンクリートの打設が仕上げを左右する。

（二） 排水ポンプ稼働とコンクリート打設時期。第一期工事の後半、明治四二年四月六日から六月二二日までの間にポンプを稼働させた記述があるのみ。常識的に考えて、第二期と第三期の橋台の水面近くの石積みとコンクリート打設工事で



はポンプによる排水が必要、コンクリート打設時期は第二期と第四期まで、第二期は明治四十二年六月二七日から九月七日までで、「年の暮れ近い」設定と矛盾。第三期は明治四十二年九月七日から四四年三月二日までで、「年の暮れ近い」一二月は四二年と四三年の二回、四三年一二月は護岸の石垣や翼壁の取り付け等の仕上げ工事で排水ポンプが稼働する必然性がない。そのような理由で日本橋界限のシーンは明治四二年一二月の光景が最有力となる。

おわりに、『暗夜行路』の日本橋界限の記述の歴史的な意義は、明治前期の近代洋風建築物への建て替えが、後の関東大震災で失われてしまう日本橋界限の姿。ビルディング(資本主義の象徴)、首都の威信を示す日本橋の架け替え等、小説ではあるが志賀の描写は精緻を尽くし、東京の発展形態、産業技術史を考えるうえでも、非常に貴重な記録であると思われる。

(連載第13回)

《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る。》

その6

原田京平ファミリーの人々の著作及び参考資料一覧》

付 坂上弘先生のこと

画家・歌人 原田京平とそのファミリーの旧宅跡地(現 加藤様邸ⅡKフラットⅡ東京都世田谷区桜丘四一九一三十六) 探訪・取材の記

平林 清江(会員)

お便りをいただき私の方こそご研究の中身にも思い及ばず立話のみで失礼いたしました。

瀧田樗陰もそうですが、編集者と作者の切磋琢磨は文学の源泉だと思います。そこに光があたるとよい研究になります。"色彩が立っている"はよいことばで、よい作品には何かが立っているのです。

日本近代文学館が研究のお役に立てたことを知り、改めて館の重要性・存在の価値をもっともって確立しなければと思いました。

ムロン、傘も沢山おいておかねばなりません。

平成二十七(2015)年十月五日

坂上 弘先生(ハガキ)より

一、原田京平ファミリーの人々の著作

・原田京平(はらだ きょうへい)

画家・歌人 明治二十八年十月〜昭和十一年一月、現浜松市生まれ、太平洋画会、日本美術院洋画部、春陽会会友、雅号に恭平・聚文・和周

遺歌集「雲の流れ」(昭和十一年五月二十五日編集・発行原田睦)

・原田 睦(はらだ むつ)

画家 明治三〇年三月〜昭和五九年九月、青森生まれ、女子美術学校(現 女子美術大学)日本画科卒、国画会会員、

「原田 睦八十八歳自選画集」(昭和五十九年九月二十日、原田睦著 原田麻那発行)

・原田麻那(はらだ まな) 原田夫妻の長女

染織家、大正十一年一月〜平成十八年七月、千葉県我孫子町(現我孫子市)生まれ、昭和十四年、明星学園高等女学校卒、国画会会員、

「原田麻那の染織」(一九九八年五月二十六日、原田麻那著 求龍堂発行)

・原田 南(はらだ みなみ Minami Astro logo) 夫妻の次女

洋画家 大正十四年九月〜平成二〇年四月、我孫子町生まれ、後アメリカ国籍取得、ニューヨーク在住、新制作協会協友

「世界少年少女文学全集」十六、ヨハンナ・シュピリ作、植田敏郎訳、一九六〇年、創元社掲載の「アルプスの山の少女」の挿絵など挿絵画家として活躍

二、原田京平ファミリーにかかわる参考資料

【図録】

・「第一回聖徳太子奉讃美術展覧会 西洋画之部」

原田京平の出品作品2点が、写真版(モノクロ)で掲載されている。作品名は《春沼》、《冬され》、出品者名は「原田聚文」である。

・「第一回聖徳太子奉讃美術展覧会 日本画之部」

・「第一回聖徳太子奉讃美術展覧会 彫刻之部」

(東京都現代美術館所蔵、江東区三好4の1の1、03-5245-4111、資料データ:請求記号K7021/771/1の1・聖徳太子奉讃美術展覧会図録第一回(大正十五年)・聖徳太子奉讃会編纂・東京巧芸社1926(大正15)・06・248p・東京府美術館)

・「我孫子白樺派を継ぐ者―原田京平の生涯」

我孫子市白樺文学館 平成26年度特別企画展図録(平成28年3月31日、我孫子市白樺文学館編、我孫子市教育委員会文化・スポーツ課発行)

・「原田京平展 我孫子を詠んだ歌人 我孫子を描きし画家 原田京平をめぐる人々―白樺と民藝の絆―」

我孫子市白樺文学館 平成27・28・29年度企画展(平成31年3月31日 我孫子市白樺文学館編、我孫子市教育委員会文化・スポーツ課発行)

・「近代彫刻の天才 佐藤玄々(朝山)」

佐藤玄々(朝山)著、(2018年11月4日、編者増淵鏡子 福島県立美術館・坂本篤史、福島県立美術館・北川智昭 碧南市藤井達吉現代美術館・小川貴史 株式会社三越伊勢丹 株式会社求龍堂発行)

*《原田恭平(聚文)像》の写真及び解説文掲載有り 30頁

* 麻那が伝えた《原田恭平(聚文)像》との出会いと、調査の顛末(平林清江執筆)(「我孫子・白樺派を継ぐ者―原田京平の生涯」、我孫子市白樺文学館 平成28年3月 8-11p収載)のタイトル名掲載。

本文は、図録「我孫子白樺派を継ぐ者―原田京平の生涯」に収載。

・「浜松での原田京平展の記録」

2022(令和4)年3月、編:豊澤楯彦

・「いばらき工芸大全Ⅲ」 染織の巻@2018

(平成30年1月2日(火)〜3月11日(日)開催、茨城県陶芸美術館)

・「柚木沙弥郎」と「女子美工芸の教育」に関する調査研究報告書

(企画女子美術大学デザイン・工芸学科工芸専攻、学校法人女子美術大学発行 2022(令和4)3月12日)

・「春陽会誕生100年 それぞれの闘い岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ」

(編集・制作 東京ステーションギャラリー他、発行日2023年9月16日、発行者 庄司美樹)

・「2024 第98回国展工芸部作品集」

発行日 2024年5月1日、発行 国画会工芸部、編集 瀧田史宇・古俣和子・萩原芳典・原清・森田麻里・綿貫倫子・五十嵐沙樹・下地康子・村澤亨、制作 下野新聞社、監査員長 松崎融、陳列委員長 鈴木均治

【所蔵目録】

・「原田京平関係資料目録」

(我孫子市白樺文学館編、我孫子市教育委員会文化・スポーツ課発行、平成30年3月31日)

【学術論文】

・『有島武郎全集』未収録・有島武郎の志賀直哉宛書簡 原田喬氏所蔵・白樺文学館寄託資料―

(瀧田浩 二松学舎大学教授執筆、『有島武郎研究』第十五号、2012年9月、有島武郎研究会発行)

・瀧田哲太郎(樗陰)の志賀直哉宛書簡―原田喬氏所蔵・我孫子市白樺文学館寄託資料―

平林清江執筆『上智大学国文学論集』第48号、(二〇一五年一月八日、上智大学国文学会発行)

*現在、これら2点は我孫子市白樺文学館に寄贈され、同文学館の所蔵である

・文化空間「我孫子・白樺派」に集う人々―原田京平を中心に―

稲村 隆(「近代日本の歴史と史料」 2022年3月5日、編者 長井純市、発行者 平田勝)

【随筆】

・手賀沼畔居の画家・歌人原田和周(聚文)と、彼が招いた歌人たち(窪田空穂・染谷進・宇都野研・割田斧二・宇野某、大正十四年〜昭和二年)

（平林キヨエ執筆 「我孫子の文化四十年の歩み——嘉納治五郎銅像建立記念特集——」（令和三年四月二十六日、我孫子の文化を守る会、発行者美崎大洋）市販図書（1部1000円）

【会報】

・わたしの一冊『新派和歌評論』（黒瞳子著 実際の引用資料は「平出修集」から

（世田谷文学館友の会会報第52号、平成29（2017）年12月19日発行掲載、平林清江）

・世田谷区民ではないけれど…… “雲のゆくえは、我孫子そして世田谷” ～千葉県より～

（平林清江執筆、「世田谷文学館友の会」会報第56号、2019年12月12日 世田谷文学館友の会発行）

【雑誌】

・『芸術生活』

昭和39年12月号 おんなの辞典12 原田麻那、（草柳大蔵 渡部雄吉撮影）

・『婦人画報の美しいキモノ』

259号（2017・春・2月20日発売、（株）ハースト婦人画報社発行）

【デイブイデー】

・「遙かな異国への憧れを織る 染織家 原田麻那」（財団法人常陽藝文センター、1998（平成10）年、制作21分）

・「女子は是れ美術の天使なるべし」玉子と志津、女子美術教育に捧げた生涯」

85分、（女子美術大学創立120周年記念、2020年11月）

【新聞掲載記事】

・ニッポン絵ものがたり 原田京平「ハケの道と手賀沼2」

*手賀沼 発見された「白樺」の記憶（よみほつと日曜版、（執筆小梶勝男筆、読売新聞2021年（令和3年）6月27日（日曜日））

【その他の参考図書】

・「三岸好太郎 昭和洋画史への序章」

（匠 秀夫著、北海道道立美術館、昭和43年1月1日）

・「聖徳太子奉讃会史」

（増山太郎編著、公益財団法人永青文庫、平成22年10月11日）

・「不可思議国の探求者・木下杢太郎——観潮楼歌会の仲間たち——

（丸井重孝著、二〇一七年十月十五日発行、短歌研究社）

・「ふるさとの今昔」桜丘およびその周辺地域」改訂版

（特定非営利活動法人世田谷桜丘まちづくり、2023年4月1日発行）

・「日本美術院百年史」第五巻

（企画 日本美術院百年史編集委員会、発行（財）日本美術院、台東区谷中4の2の8、平成16年4月）

あとがきにかえてー坂上弘先生のこと

本号の扉に記した短い一節について、少々解説を施しておきたいと思う。筆者にとつては、今では思い出深いものとなったが、ご覧になった読者の皆さまにはお分かり頂けないからである。

我孫子にお住まいの作家で、駒場の日本近代文学館の理事長をされていた坂上弘先生から頂戴した「ガキの文面を、そのまま引用させていただいたものである。

ハガキの日付は平成二十七年（2015）年十月五日となつているが、さかのぼること同年九月半ばのまだ暑い日、我孫子の若松通りを歩いていたら、先生をおみかけした。入院中の奥様を見舞われて、その帰り道であつたようだ。お疲れの様子なので、私は少しためらったが、勇気をだして、「せんせい」と声をおかけしたところ、先生は立ち止まって一瞬戸惑いの表情を見せられた。

先生は私のことを御存知ないが、私の方は先生の講演を何度もうかがっている、我孫子には大勢いる熱心なファンの一人なのだ。

こちらとしては、勝手に親近感を抱いているから、最近近代文学館で調べ物をしてきた、などと申し上げた。そして、同館にて調べ物をしたおかげで「論文が書けたので、一度ご覧願いたい」などと、若い頃だったら、絶対出来ないようなお願いまでしてお別れした。後日論文をお送りしたところ、さつそくこの扉にあるような感想文をお送り下さったのである。

先生にご覧いただいたのは、この号の本文中にも記した、「瀧田哲太郎(樗陰)の志賀直哉あて書簡―原田喬氏所蔵・我孫子市白樺文学館寄託資料―」のことである。

「我孫子在住白樺派」の一人、志賀直哉が我孫子に居住した頃、やはり我孫子に暮らして、志賀と親しく交際した画家・原田京平が、志賀から譲られたのがこの書簡で、その書簡について、分析・解説したのが、この論文である。その中で、京平の日本美術院時代からの洋画の指導者、山本鼎が書いた小説「哥(コ)路(ロ)」を取り上げ、「色彩が立っている」と述べたのを、坂上先生は「良いおことば」と評価して下さったのである。また、「編集者と作者の切磋琢磨は文学の源泉で、ここに光があたるとよい研究になる」と、私の論文の足りない点にも、やさしく言及され、人と人との切磋琢磨こそが、なによりも大事と、この論文の欠点を御指摘くださったのだった。私はこのご指摘に深く感銘を受け、そして心に刻みつけたのである。同時に、筆者のような者に対しても、まっすぐに向き合って下さる先生の誠実さを、生涯忘れることはないと思ったことであつた。

ところで、最後の「ムロン、傘云々」について一言加えると。近代文学館に調べ物に行つた日、閉館間近に突然雨が降り出したのである。見かねたスタッフの方が傘を貸して下さったことを、先生にお伝えしたところ、いただいたのが、ユーモア溢れる先生のお返事の一行である。

・・・・・・・・・・・・・・・・

世田谷文学館友の会と坂上先生

なお、世田谷文学館友の会の方のお話しによれば、坂上先生は、東日本大震災後の平成25(2013)年3月9日、同会のために「震災と文学」というテーマで講演をされたとのこと。

坂上先生は、同会の平出洸(ひらいで ひろし)前会長よりちょうど一学年お若く、終戦時は、9歳でいらつしやつたとのこと。

聴講者から戦争が始まつた時どう思いましたか、という質問があり「市井の人々は変わらない日常を過ごしていたのが事実です」と、ご回答されたとのこと。友の会の方は少々驚き、年齢の近い平出先生や、その他の方々にもお聴きすると、やはり戦争激化までは平凡な日常だったとのこと。

「作家」としての立場で戦争を知っている方は少なく、直接お話しをお聴きできたことは、貴重な経験で、友の会の財産になったとのことです。

・・・・・・・・・・・・・・・・

利根川の河原と坂上先生

「利根の河原を吹く風の音は音楽である」

先生は、利根川の河原を散策されるのが大好きでいらしたとのことである。志賀直哉と、直哉の最初の弟子瀧井孝作が住んだ町ということで我孫子に転居され、また、利根川の河原(北新田)に近い「つくし野」に住まわれて、利根の河原をお気に召されたのだ、とのことである。

先生は「利根の河原を吹く風の音は音楽である」と、どなたかに言われたことがあり、少数ではあるが、我孫子の心有る人々の間で宝物のような言葉として伝えられているのである。

先生はコロナ禍の第五波激しい、令和三(2021)年八月に亡くなられた。奥様が、すでに亡くなられて、おさびしかったのではないかと想像している。

私も少しの喪失感と、もしや、散策中の先生にお会いできるのではないかとの思いを抱きながら、時たま利根川の土手の草道を歩いてみるのである。

令和四年(二〇二二年)三月末日

大利根の河原に臥して見る筑波
あまりに遠くさびしくもあるか
我孫子 大正十年 原田和周『雲の流れ』



(以下、次号 その7に続く)

《資料などの寄贈》

平林清江会員は、かつて白樺文学館の学芸員を務められました。この「世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る」を書き上げたことを区切りに、同稿の参考資料を白樺文学館に寄贈されました。

六月一日に、遺歌集「雲の流れ」、「原田睦 八十八歳自選画集」など十八冊と写真を白樺文学館に納められました。

また、我孫子の文化を守る会にも過日ご寄付されました。

二〇二五年令和七年二月二十八日開催

「白樺のまちの見える化」に向けて

ちば文化資産「白樺派と文人の郷」への提案

「見える化の第三弾」放談くらぶに参加して

ふるさと我孫子ガイドの会

会長 中込 力三

「白樺派のまちの見える化」の提唱者は、今回の講師の吉澤淳一さんです。

第一弾は、志賀直哉が描いた小説で我孫子が如何に描かれているのか。第二弾は「雪の日」を題材に我孫子が如何に描かれているのかを、夫々の講師が放談されています。

第三弾の今回は、正に締め括りに相応しい内容でありました。吉澤さんの大所高所からの「見える化」の意義、そして具体例への展開は、私自身、何とか実現したい気持ちをより強く感じる事になりました。

白樺派の面々は、我孫子に大きな置き土産を残してくれました。我孫子で如何に過ごしたのかを小説や研究論文等で描いてくれています。特に、



志賀直哉は、我孫子に移住するまでの何年かは文筆活動を休んでいたのですが武者小路実篤の移住を機に、文筆活動を再開し名作を残しています。そんな事から「見える化」の最初の提示を志賀直哉に設定しているのですが、吉澤さんの具体例の話から、他の自治体も

我が町を小説に描いた作者を、又は、小説の描かれた場所を「見える化」の対象として描くことに工夫していることを改めて知ることになりました。

夫々の自治体の魅力を増す題材として取り上げ、イメージ向上を狙っているのでしょう。

我孫子市は、白樺派のこの財産をちば文化資産

「白樺派と文人の郷」として登録しております。

吉澤さんは、この視点から「見える化」の実現を熱く語りました。

更に、吉澤さんは、平成二十二年一月二〇日の千葉日報の新聞を例に、当時は、「文人たちの息吹を感じるまちへ」をスローガンに邁進していたことを語りました。

この新聞を見て聴いて私は、「ウオッ！」と思いました。そうです、「見える化」は、息吹を感じるまちの具体化の一つなのだ、と思ったからです。

「見える化」の具体化の思いが更に増した吉澤さんの「放談くらぶ」でした。

☆ ☆ ☆

あびこだより118

放談くらぶ

「世界遺産を楽しく学ぶ！」

「我孫子から30分で行ける世界遺産」

モダン建築愛好家 村上 千明

みなさん、「世界遺産」という言葉から、どんなことを思い浮かべますか？「世界遺産」という言葉はよく耳にするものの、「実際にはどのようなものなのか？」と疑問に感じたことのある方も多いのではないのでしょうか。

今回の講話「世界遺産を楽しく学ぶ！」我孫子から三〇分で行ける世界遺産」では、前半のパー

トで、世界遺産の基礎知識をやさしく、そして楽しく解説いたします。

世界遺産とは何か、どのような基準で選ばれるのか、登録の目的や背景などをわかりやすくお話ししながら、その魅力をより身近に感じていただける内容です。

そして、後半では、我孫子からJR常磐線で三〇分ほどで訪れることのできる世界遺産、東京・上野の「国立西洋美術館」を取り上げます。

「国立西洋美術館」は、東京都内にある“唯一の世界文化遺産”です。近代建築の巨匠ル・コルビュジエが設計したこの美術館は、二〇一六年に世界遺産に登録されました。講話では、国立西洋美術館の世界遺産としての価値だけでなく、この博物館の建設に尽力した日本人建築家たちにも光を当て、ル・コルビュジエが、日本の近代建築にどのような影響を与えてきたのかについてもご紹介いたします。

この講座が、世界遺産や近代建築に関心を持つきっかけとなり、文化をより深く味わう契機となれば幸いです。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日時〓八月一七日(日)午後二時～四時
場所〓あびこ市民プラザ(旧エスビ) 三階



会員消息

「趣味を活かした人生を求めて」

会員 野崎 信一

絵を描くことに夢を持ち、勤め先近くの百貨店、画廊及び都美術館など小まめに足を運び画家様の素晴らしい構図、色彩配色など参考に作品作りを励みました。休日など利用し風景中心に油彩画を描きました。

三二歳のとき我孫子市に当時数少ないプロ、アマの人材がそろった美術団体のあることを知り、加入して年一回の市民展に作品を出品することが楽しみでした。定年が近くなり将来を考えたとき、多くの画家様が作品展示をする場所を探していることを知り、当時我孫子には、画廊、ギャラリーが少なく、居住五〇年お世話になった第二の故郷の地域発展に微力ながら心を注ぐと妻と二人三脚で「ギャラリー芙蓉」を開設し、一六年間千葉、東京、茨城のものづくりプロの画家、写真家など直接足を運び二年先までスケジュールがいっぱいになるギャラリーと作家仲間からありがたい声を聞くことができました。毎月盛況な作品展示ができたことは、妻が健康で全てを犠牲にして協力してくれたお陰と感謝しております。

プロ水彩画家岩尾計助氏の出会いがあり、自宅敷地内に絵画教室を開設し、絵を愛する仲間たちと、月二回の指導のもと五年間、独自の水彩技法を学びました。絵を通じて社会貢献していこうと決意し、絵のテーマを絞り二〇数年間他にない歴史、文化、白樺派同人、自然環境の良さ魅力ある街の知名度アップを願い、図書館などで資料を集めて、市内百ヶ所を徒歩でスケッチして、シナベニアに透明

文化・芸術振興、地域の情報発信
野崎信一 コーヒーアート展 (文化財・名所・風景)

あびこ北の鎌倉(白樺派)・市内を描く

日時：2025(令和7)年 4月 24日(木)～30日(水) AM 9:30～PM 4:30(初日 12:00 / 最終日 4:00)

会場：我孫子インフォメーションセンター(アビシルベ)《けやきプラザ前》

TEL：04-7100-0014 JR我孫子駅南口下車 徒歩1分 Pなし



天神坂



杉村楚人冠記念館

新作品を展示いたします。是非ご来観ください。会期中終日在廊しています。

2025(令和7)年4月開催のコーヒーアート展の案内状(住所等を一部加工)

和紙などに透明水彩で描くことができるか挑戦して、納得できる作品が出来上がりました。

お付き合いの画伯様から自分の絵はこれだと言われる作品を制作したら良いとの声に目覚めて、コーヒーで描く作品作りを目標にして、インスタントコーヒーを煮詰め、濃淡の絵の具を作り、面想筆、ぼかし筆を使い、市内建物、文化財、名所、風景など二年間、コーヒーの臭いをかきながら試行錯誤して挑戦いたしました。個展は、作品会場案内状など一人準備で気力体力を使いますが、日ごろお付き合いをしているお客様に支えられ満八一歳に一回目の個展を盛況に開催できましたこと感謝いたします。

自宅前道路側の塀にロードギャラリーと名づけ、新旧作品を展示。近隣を散歩の方、興味ある方に評判となり、作品入れ替えを楽しみにしているとの声が寄せられています。

また今年四月から一年間葛川柳会からご依頼があり、月刊誌「ぬかる道」の表紙に水彩、切り絵、コーヒーアート作品など掲載していただくことになりました。我孫子を知る上で会員の佐藤やす子様から話があり、我孫子の文化を守る会に入会し、放談くらぶで白樺派の人物活躍等の講座を受講して非常に勉強になりました。

守る会の役員様ご出席会員の方々の知識が豊富で、頭の中が絵のみの浅学非才な自分を恥じております。これから健康に留意し、趣味の絵に情熱を持ち、人生を楽しんで参りたいと思います。

二〇二〇(令和二)年入会



第五十三回短歌の会 五月二十七日開催

一つづつ馴染んだものが消えてゆく
朝ごと飲みしビンの牛乳

四世代揃いて夕餉の食卓を
囲みて思う日本の平和

納見 美恵子

母の日に花と書かれし不在票
どの子かしらと心ときめく

四、五年も花の咲かずの蘭の花
今日驚きぬ三つの蕾に

村上 智雅子

草むしり主人がいつもしてくれた
今は私と二人でしてる

背中ごし人の気配にふりおけば
笑顔満面友の顔あり

前原 安世

夕やけに染まりし街に子らの声
昭和は百年けふ静かなり

ほどほどに苦き世過ぎをはしり来ぬ
ゆるり歩みたき老いの人生

佐々木 侑

死顔の美しさなど何としよう
生きて居て欲し駄々こねて欲し

しきり散るさくらの下を村人達に
運ばれてゆきぬ母の柩は

伊奈野 道子

路のとう天ぷら料理苦味より
ふわりと抜ける香り楽しむ

払われて片手の袋邪魔してた
ハッとして侘ぶ雨の日のバス

芦崎 敬己

当会の行事予定

□ プロジェクト 「短歌の会」

第五四回短歌の会 けやきプラザ10階小会議室

日時 七月二二日(火) 13:30~

第五五回短歌の会 けやきプラザ10階小会議室

日時 九月二四日(水) 13:30~

◎短歌を初めて学ぶ方、一緒に仲間になつて、
短歌を楽しみませんか。(参加費無料)

問合せ ☎(090-5333-1804(村上))

□ 「放談くらぶ」 (概要は8頁を参照)

日時 八月一七日(日) 14:00~16:00

会場 あびこ市民プラザ3階(会議室1)

講師 村上千明氏(モダン建築愛好家)

演題 「世界遺産を楽しく学ぶ!」我孫子か
ら30分で行ける世界遺産」

定員 三五人(先着)

◎参加費 三〇〇円(当会会員無料)

問合せ ☎(090-2594-0425(佐々木))

「史跡文学散歩」中止のお詫び

六月十四日(土)に予定しました史跡文学散歩「日本橋界限を訪ねる」は、スタッフの急な体調不良により、実施前日にやむなく中止と致しました。参加を申し込まれていた方々、関係者の皆様には、ご迷惑をお掛けしました。お詫び申し上げます。

秋以降に同じ史跡文学散歩を実施の予定です。改めてご案内いたします。

是非、多くの方のご参加をお待ちしています。



編集後記

▼当会の会員数が三月末日現在で男性三四名、女性二六名の六〇名となり相当数減少した。一時期の半数程に迫っている。前年度の入会は四名、退会は一六名である。本年一月以降、役員会はイベント実施に合わせ入会呼掛けを行ってきたが、今後もありメンバーシップをとり、会員一人一人と対応策を検討し、早急な会員増強策を実行しなければならぬ。▼SNSを使った選挙活動が最近一層広まっている。当然、正しい情報もあるが、根拠のない誤情報やデマも含まれている。情報過多の時代に私達個々人が情報リテラシーを主体的に持つ必要があるのではないかと。▼更に、参院選での投票行動には減税や給付金といった目先の施策に目を奪われず、人口減少や地球温暖化、戦争・国際紛争への平和構築等、明日の視点を踏まえ大人の判断をしたいものだ。▼今年は、我孫子市制施行五五周年であり、又、戦後八〇年の区切りの年だ。当会も何を引き継ぎ、何を構築すべきか、検討していきたい。(あしたか)